



株式会社都市機能計画室 POUF

604-8261

京都府京都市中京区式阿弥町130

SHIKIAMI CONCON no.2

—

+81-(0)75-963-6010

—

info@pouf.co.jp

—

www.pouf.co.jp

公共(的)プロジェクトの コミュニケーション設計会社

建築や都市そのものを設計するのではなく、
人や情報の関係性をつくる「パブリックリレーションズ(PR)」という考え方のもと、
リサーチ+編集のスキルを用いて、
都市機能を円滑に動かすサポートをする会社です。

代表取締役

榊原充大

さかきばら・みつひろ

1984年愛知県生まれ。

2007年神戸大学文学部人文学科芸術学専修卒業。

2008年から2023年まで、建築リサーチ組織「RAD」共同運営。

建築や都市に関する多様な相談を受け、

調査・執筆、提案、チームビルディング、

プロジェクトディレクション/マネジメントなどの役割を担い、

アイデアからプロジェクトの実現までをサポートします。

POUFの機能

1 リサーチ・可視化

問題を定義し直す

見えていない課題・価値を発見
ヒアリング・調査・アーカイブ化
仮説 → 検証 → 戦略化

2 コミュニケーション設計

関係者をつなぐ

ワークショップ
市民参加設計
対話の場づくり

3 情報発信・PR戦略

社会に届ける

編集・ストーリーテリング
ウェブ・メディア設計
シティプロモーション

4 リレーションズ

参加をデザインする

「関わりしろ」を設計
市民を“当事者化”する仕組み

POUFの主な実績とクライアント

POUFの主な実績

- ・奈良県斑鳩町立図書館との協働による斑鳩の記憶アーカイブ化事業企画実施(2012年-)
- ・愛知県岡崎市QURUWA戦略情報発信検討業務及びパブリックリレーションズ(2016年-)
- ・京都市立芸術大学及び京都市立銅駝美術工芸高等学校移転整備工事前・機運醸成チームマネジメント(2017年-2023年)
- ・兵庫県あかし市民図書館ほんのまちづくりプロジェクトたこ文庫企画および運営(2018年-)
- ・千島土地によるアート複合施設Super Studio Kitakagaya(SSK)開設ディレクションサポート(2019年-2020年)
- ・都市デザイン事務所ハートビートプラン(HBP)PR計画コンサルティング(2019年-2021年)
- ・大阪府泉大津市立図書館(現:シープラ)リニューアルプロジェクトリサーチチームマネジメント(2020年-2021年)
- ・大阪府泉大津市(仮称)小松公園(現:シーパspark)整備事業基本設計・実施設計時リサーチチームマネジメント/
- ・コミュニティ形成支援事業企画実施(2020年-2024年)
- ・神奈川県厚木市新市庁舎設計時の市民参加型ワークショップあつぎ過ごすラボミーティング企画運営(2021年-2022年)
- ・北海道砂川市コスメブランドSHIRO新工場づくりにおけるコミュニティデザインサポート(2021年-2023年)
- ・大阪府旧門真市立北小学校跡地未来づくりワークショップおよび社会実験(2022年-2024年)
- ・長野県小諸新校施設整備事業基本計画策定支援業務(2022年-2023年)
- ・有楽町アートアーバニズムプログラム「YAU」PR計画(2022年-)
- ・京都市新たな空き家利活用促進業務「Kyoto Dig Home Project」(2022年-)
- ・大阪府高石市羽衣駅前広場等整備実施設計業務(2025年-)

クライアント

図書館/ミュージアム

明石市民図書館、斑鳩町立図書館、京都国際マンガミュージアム、京都精華大学国際マンガ研究センター、滋賀県立美術館、株式会社図書館流通センター

地方自治体

斑鳩町、泉大津市、宇部市、岡崎市、京都市、京都府、京都:Re-Search実行委員会、QURUWA PR実行委員会、高石市

教育機関

瓜生山学園、京都市立芸術大学、京都工芸繊維大学、京都精華大学、滋賀県立大学、立命館大学

設計事務所

株式会社アイダアトリエ、株式会社E-DESIGN、乾・RING・フジワラボ・o+h・吉村設計共同体、株式会社空間創研、ジオ・グラフィック・デザイン・ラボ、合同会社柴田木綿子建築設計事務所、株式会社タトアーキテツツ、フジワラボ・トミト設計共同体、西澤徹夫建築事務所、株式会社フジワラテッペイアーキテツツラボ

その他事業者

株式会社アフタヌーンソサエティ、株式会社井上ビジネスコンサルタンツ、一般財団法人おおさか創造千島財団、おとがワ!活用実行委員会、特定非営利活動法人岡崎まち育てセンターりた、株式会社国際開発コンサルタンツ、誉仁株式会社、株式会社SHIRO、株式会社新建築社、株式会社ジェイアール東日本企画、株式会社TANK、地域金融価値創造協議会、千島土地株式会社、株式会社ぬえ、有限会社ハートビートプラン、合同会社バンクトゥ、ホームックス株式会社、株式会社リノベリング、株式会社ロフトワーク、株式会社山口書店、有楽町アートアーバニズム実行委員会

斑鳩の記憶 アーカイブ化事業

奈良県斑鳩におけるまちの資源を可視化するためのワークショップを、建築リサーチ組織RADとして、斑鳩町立図書館、そして京都大学地域研究統合情報センター(CIAS、当時)との三者共同で、企画運営し、その結果を反映するためのデータベースを構築しました。現在では、RADから弊社が引き継ぎ、斑鳩町立図書館、そして金沢大学所属の研究者谷川竜一氏との連携で継続しています。

協力期間

2012 -

協力内容

アーカイブサイトの構築、
ワークショップ企画運営

クライアント

斑鳩町

パートナー

阿部研二

アウトプット

ウェブサイト

- 1 ————— このアーカイブ化事業では、斑鳩の「道」に着目し、それぞれの道沿いで撮影された古い写真を集め、ワークショップではこれらの古い写真を見ながら、写真に映り込んでいる建物や自然などに関する市民のみなさんが持つ情報、記憶を数珠つなぎにして、斑鳩の文化的風景を再構成することをめざします。
—
- 2 ————— 成果物として、今回のワークショップで収集した古写真や地域の声を蓄積し、より多くの方に楽しんでいただいたり活用していただくためのデータベース「Chienowa Ikaru」を構築。本ウェブサイトではキーワードに応じた抽出、地図からの絞り込みが可能となっています。
<http://archive-ikaruga.org/>
—
- 3 ————— また、ワークショップの副産物として、斑鳩のある日を写真からたどる、「新聞」ならぬ「旧聞」を作成。参加者に配布しました。
—
- 4 ————— このデータベースは、地域の人が持っている地域の風景を撮影した写真などの資料を蓄積するためのものであり、単に資料として写真を蓄積するだけでなく、個々の資料にまつわる地域の人の「声」とあわせて参照できるようにしています。各写真にタグをつけることで、関連する資料が連鎖し、アーカイブを見る体験がより回遊性を持つようデザインしています。
—
- 5 ————— 事業13年目にあたる2025年度には、データベースのリニューアルをはかりました。大きな構成は変えず、より現代的な見え方に調整しました。



愛知県岡崎市 QURUWA 戦略パブリックリレーションズ

愛知県岡崎市、名鉄東岡崎駅前を流れる矢作川支流の一級河川である乙川周辺に位置する公共空間を結んだエリア「QURUWA」を中心に、公民の投資を集中させた都市開発が「QURUWA戦略」です。POUFはまだ「QURUWA」の名前がつく前段階、2016年度から地元NPOに併走し、2019年度を起点としてパブリックリレーションズのためのリサーチ・戦略づくり・実現やウェブサイト構築と運用などを担当しています。

協力期間

2016-

業務内容

リサーチ、情報発信ディレクション、
ウェブサイト提案・運用ディレクション

クライアント

岡崎市

パートナー

株式会社アフタヌーンソサエティ、
合同会社バンクトゥ、桑田亜由子、
neucitora、Okazaki Micro Hotel
ANGLE、ONE RIVER、山田美法など

アウトプット

レポート、ウェブサイト、その他

- 公共事業として「QURUWAとは何か?」についての説明は多くあるものの、市民にとっての接点を想像できる媒体がなかったため、「わたしとQURUWA」を考えることができるパブリックリレーションズ(PR)の戦略づくりをおこないました。
- 中心に据えたのは、QURUWAの「入口」になるようなウェブサイト。すぐに制作に取り掛かるのではなく、QURUWAのために望ましい情報発信の形をリサーチした上で戦略を立てて取り組むことにしました。2019-2020年度の、いわば「リサーチ期間」と言える検討業務から、オンラインコミュニケーションの専門家として合同会社バンクトゥとチームを組んでいます。
- 検討業務は2段階で実施しました。1年目はQURUWAに必要なとされている情報発信の形を検討するためのリサーチ。岡崎市の現状の情報発信方法や地元の媒体の種類を洗い出して課題を見つけつつ、他市の事例も研究しました。岡崎市のLINEアカウントを利用した市民アンケートも実施し、1000名以上の回答を得ることができました。
プロジェクト2年目はサイト実現に向けて、1年目のリサーチ結果を具体的に整理。ウェブサイトを地域のクリエイターと連携して運用すべく、連携先候補へのヒアリングなども実施しました。
- 完成したウェブサイト「QURUWAと、」では、QURUWAの日常を見てもらうよう、イベント時の華やかなまちの様子だけではなく、地域の方々が「特別じゃないけれど好き」と思える「ふつうの日」の風景をトップページに掲載。地域のメンバーと連携し、QURUWAエリアで実施されるイベントやスポットの紹介や、QURUWAで活動する方を紹介する連載「あの人のトライ」を運用しています。
- ウェブサイトの他にも、物理的にQURUWAの情報が知れる「QURUWAボード」や、各種刊行物の制作をPOUFで担当。2024年度からは岡崎市とPOUFや地域のメンバーと「QURUWA PR 実行委員会」を発足。まちづくりの次を考えるツールキット『QURUWAまなびのてびき』の販売など、収益事業をおこないPR費に充てて運営しています。



京芸・銅駝移転プロジェクト リサーチ・機運醸成 チームマネジメント

京都市立芸術大学(京芸)と京都市立銅駝美術工芸高等学校(銅駝)を、JR京都駅東に位置する崇仁地域へと移転するプロジェクト。2017年の設計者選定プロポーザル時に代表榊原が別途運営するリサーチ組織RADメンバーとして参加した、5社の建築事務所からなる設計企業共同体(ジョイントベンチャー=JV)が設計者として選定されました。榊原はリサーチ・機運醸成チームの窓口をつとめました。2023年にリニューアルオープン。

協力期間

2017-2023

業務内容

リサーチプランニング、リサーチ、プロジェクトマネジメントなど

クライアント

乾・RING・フジワラボ・
o+h・吉村設計共同体

パートナー

UMA design farm、MUESUM、
齋藤歩、矢津吉隆、山田毅、松見拓也、
フロツカーネル、RAD、下寺孝典、
埴田ななみ、高橋藍ほか

1 プロポーザルの募集要領の中では「対話」が重視されていたことから、リサーチ・機運醸成チームをJV内に組み込む提案をおこないました。その中で、JVと地域の方々との対話機会の窓口や、設計の中で求められる「対話」のあり方を検討したりリサーチプランを立てたりするマネジメントなどを担当しています。

2 リサーチ・機運醸成チームは、デザイン事務所 UMA design farm、編集事務所 MUESUMのほか、京芸のOBである矢津吉隆、当時同大学博士課程在学中だった山田毅、アーティストでもある写真家の松見拓也、アーカイブの専門家である京都大学総合博物館の齋藤歩、ウェブサイトの制作をおこなうフロツカーネル、京都の近隣大学の学生有志などによって組成された10人ほどのチーム。リサーチチームの定例会は月一回程度のペースで開催しました。

3 リサーチ・機運醸成チーム定例会では、現在進行形で京都で進んでいる事業などの情報を集め、より詳細にリサーチすべき対象を検討しました。具体的なリサーチとしては、地域住民、大学教員・学生へのヒアリングサポート、京都の大学内でのアクティビティリサーチ、京都のアートスペースやシェアアトリエの調査、イベント年表制作などを実施しています。東京のJVオフィスに「リサーチウォール」という壁面を設け、これらリサーチの結果をアップデートしていきました。

4 このプロジェクトでは、情報の公開を慎重におこなうため、JV内だけでオープンなウェブサイト構築・運営し、リサーチなどを通して得られた地域に関する情報を設計のために共有しました。

5 学生が共通に利用する工具をシェアするためのシステムをリサーチし、芸大側に対してプレゼンしたり、新しい購買部の形や新しいライブラリを提案するなどにも実施。解体される敷地内の小学校にまつわる展示を地域の方や大学と連携しておこないました。



写真・松見拓也



撮影・浅野雄太



アート複合施設 「Super Studio Kitakagaya」 開設ディレクションサポート

大阪府住之江区の北加賀屋エリアに多くの物件を持つ不動産会社千島土地株式会社が所有する倉庫を、アーティストのためのシェアアトリエを含む複合施設としてリノベーションするプロジェクト。POUFはクライアントである千島土地の担当者とともに施設設計のための要件整理などをおこない、ディレクションサポートを担当しました。

協力期間

2019-2020

—

業務内容

ディレクションサポートなど

—

クライアント

千島土地株式会社

—

パートナー

前田健治など

1 ————— 千島土地は2011年から「おおさか創造千島財団」という財団を運営しながら、北加賀屋エリアをアートのまちにすることを掲げ、「NAMURA ART MEETING」などの有識者会議もサポートしてきました。Super Studio Kitakagaya (SSK)は、大阪でアーティストがよりよく制作・発表する環境が少なくなっているという危機感を背景に、施設づくりのためのディスカッションではそういった想いをすくい上げる機会となりました。

2 ————— SSKではアーティストが「つくり続ける」ことへの支援をコンセプトに据えています。アトリエとなる個室空間をできるだけ多く用意し、中には滞在制作が可能な部屋も備え、工場の名残であるウィンチもアーティストの制作ツールとして活用できる形で残しています。

制作のスタジオだけではなく、展示ができるギャラリーやフードクリエイターが利用できるキッチンなども新たに作り、地域の方が立ち寄って楽しめる場所を目指しています。

3 ————— 千島土地側の「アーティストが使える制作場所をつくりたい」という希望からはじまり、どういう施設にしたいかをヒアリングし、参考事例やPOUFからの提案を交換しつつ話し合いを重ね、施設に必要な空間、ゾーニングなど具体的な仕様をまとめていきました。並行して、連携するデザイナーの提案、ウェブサイトのディレクションなどをおこないました。

<https://ssk-chishima.info/>

4 ————— 企画に合った設計者もPOUFから提案し、設計施工は株式会社TANKが担当。設計が進む中で、クライアントとPOUFが立てたコンセプトの確認も並行しておこないました。



大阪府泉大津市立図書館 (現:SHEEPLA /シープラ) 設計時コミュニケーション& 開館支援業務

大阪府泉大津市の新図書館の設計時に関係者に向けたコミュニケーション機会をつくり、開館に向けて地域内外の方々にとっての関わりしるをつくるプロジェクト。リサーチ組織RADとして設計者選定プロポーザルから連携し、選定後には情報発信やワークショップの企画・運営のほか、設計チームのフジワラボ・トミト設計共同体が考案したツールを使った市民参加型フィールドワークの運営、フィールドワークをもとにした市役所への提案資料の作成などを弊社で担当しました。

協力期間

2019-2021

協力内容

リサーチプランニング、プロジェクトマネジメント

クライアント

フジワラボ・トミト設計共同体

パートナー

フジワラボ・トミト設計共同体、
UMA design farm、
MUESUM、阿部研二

アウトプット

レポート、ウェブサイト、その他

1 「機運醸成」とは、施設が新しくできたりリニューアルしたりする際に、地域内外の方々へ周知しながら開館に向けての意識を共有してもらうという考え方。その方法はさまざまで、設計内容を紹介する会を開催したり、チラシ配布やニュースレターの発行をしたり、フィールドワークなどをおこなったりすることで、地域内外に向け「新しい施設ができる」という機運を高めています。

2 設計時には、設計チームが東京拠点のメンバーということもあり、まちのことを知るためのフィールドワークを実施。共同体のtomito architectureが考案した「まちの素材カルテ」と呼ばれるツールを使いながらまちを歩いて泉大津らしい建物やまちなみを探すと同時に、出会ったの方々からお話を伺うことも。フィールドワークにはSNSでの呼びかけや市役所からの広報によって、関西圏の学生や地元の若い方も多数参加されました。この作業をとおして、参加者の街への認識が深まることで設計の説得力が増すと同時に、利用者の施設に対する解像度も増すことをめざしています。

3 全3回のフィールドワークの後、成果を市民の方々に向けて発表する会を開催。市役所などを通じた告知で30-40人ほどの方が来場。またその後、バスを貸し切って市民有志の方々や近隣の事例を視察に行くツアーも実施しました。このような段階を経ることで、建築をつくる側と使う側が同じ目線を共有することができ、新しい図書館に対して一緒につくっていく関係を構築できると考えています。

4 設計が終わったあとに機会を止めてしまわず、開館支援業務発信の一環で、地域の方々へのヒアリングをラジオコンテンツとして発信。機運醸成のプランニングをおこないマネジメントを実施しました。

5 並行して、新図書館内にできる地域産業を紹介するショップ「CO-ON」を地元商工会議所らとともにつくるマネジメントをし、ウェブサイトも制作しました。
<https://co-on.jp/>



写真：山根香



写真：松見拓也

大阪府泉大津市(仮称) 小松公園(現:シーパspark) 整備事業 基本設計・実施設計時 リサーチチームマネジメント コミュニティ形成 支援事業企画実施

元々は賃貸や売却の予定がなく活用意向のない住宅である「その他空き家」をどのように流通/利活用させるか、という課題に取り組むことからスタートしたプロジェクト。空き家所有者に偏りがちだった対象者を所有者、住まい手へとひろげ、それぞれにあったメディアを届け方をこころがけるPR戦略を組み立て、実施しました。掘り出し物を探る、「Dig」という音楽文化から生まれた概念を援用し、「Kyoto Dig Home Project」という名前をつけました。

協力期間 2020-2024

協力内容 リサーチプランニング、
プロジェクトマネジメント、
チームビルディングサポート、情報発信

クライアント

(仮称)小松公園パートナーズ共同企業体

パートナー

E-DESIGN、桑田亜由子、中谷利明、山根香、
桜木美幸、オカモトアユミ、追立大地ほか

アウトプット レポート、その他

1 ————— 2020年に実施された「(仮称)小松公園整備事業基本設計・実施設計業務委託に係る公募型プロポーザル」にて協力する共同企業体が選定され、すぐに4回の市民ワークショップ「設計者と囲む、小松公園アイデアテーブル」を実施。コロナ禍の中での実施に慎重を期し、毎回100名近い方々に参加いただきました。3回目には更地となっている敷地を使い、市民有志の方に「やってみよう」を試してもらって活用実験を開催しました。

2 ————— 2021年度には今後2年間の提案を求める「(仮称)小松公園整備事業に伴う地域コミュニティ形成支援外業務」のプロポーザルに取り組み、選定いただいた後にフォーラムの配信、そして「(仮称)小松公園使いこなしサミット!」と題した、公園運営に向けたワークショップを実施しました。活用実験から一歩進めた「プレフェス」を2021年11月に実施し、だんだんとワークショップや「フェス」の運営を市民のみなさんにバトンパスし、POUFはそのサポートを担当しました。

3 ————— 2022年4月には市民主導による「完成待てない!新しい公園に向けてのフェス!」を開催し、約5000人もの入場者を数えました。その際には市民公募し投票で選ばれた公園の新名称「シーパspark」を公表。その後も公園運営のためのワークショップを重ね、2023年には市民による公園運営のための組織「シーパsparkクラブ」が発足しました。

4 ————— 2023年度にはシーパsparkクラブの運営でワークショップを実施し、シーパsparkクラブの「コンセプト」と「ルール」を決定。シーパsparkクラブ入会を呼びかけるパンフレットに反映して、その作成のサポートをおこないました。



写真・山根香



写真・オカモトアユミ



京都市新たな空き家 利活用促進業務 「Kyoto Dig Home Project」

元々は賃貸や売却の予定がなく活用意向のない住宅である「その他空き家」をどのように流通/利活用させるか、という課題に取り組むことからスタートしたプロジェクト。空き家所有者に偏りがちだった対象者を所有者、住まい手へとひろげ、それぞれにあったメディアを届け方をこころがけるPR戦略を組み立て、実施しました。掘り出し物を探る、「Dig」という音楽文化から生まれた概念を援用し、「Kyoto Dig Home Project」という名前をつけました。

協力期間

2022-

協力内容

戦略立案、チーム組成、
プロジェクトマネジメント

クライアント

京都市

パートナー

株式会社ぬえ、合同会社バンクトゥ、
松本花音、株式会社タンサン、川嶋克、
YAKUMI、中谷利明ほか

アウトプット

レポート、ウェブサイト

- 1 2018年の調査では、京都市の空き家数は106,000戸を数え、そのうち賃貸や売却の予定がなく活用意向のない住宅が45,100戸ありましたが、2023年の調査によって、前者は105,300戸、後者は44,300戸と減少が見られました。ただし、京都市だけを見れば空き家の数は減ってはいるものの、全国平均としては空き家率は依然上昇を続けています。
- 2 Kyoto Dig Home Projectは、「課題」として捉えられがちな空き家を「可能性」と捉え、価値観にあった京都市の「中古住宅（ユーズドハウス）」利活用を支援する取組です。「掘り出し物」を探し出すことを意味する「Dig」という言葉に注目し、ユーズドハウスの所有者のみならず住まい手それぞれの力になることを目指して中古住宅や空き家の利活用を進めています。
- 3 Kyoto Dig Home Projectが目指するのは、間取りや広さ、駅からの距離といった一般的な不動産指標ではなく、住まい手の価値観やライフスタイルに惹きつけられる物件。こうした物件に興味を持った人がアクセス(Dig)しやすくする環境づくりがKyoto Dig Home Projectのねらいであり、その先に空き家の利活用促進があるというのが理想です。
- 4 2022年以降実施のプロポーザルでは、ブランディングやプランニングを得意とする株式会社ぬえ、情報発信を得意とする合同会社バンクトゥ、PRを専門とする松本花音とチームをつくり実施しました。
- 5 2022年度は「調査」期として各地事例をリサーチしコンセプトを定め、2023年度は「構築」期としてウェブサイトを制作し、2024年度は「展開」期としてオンライン広告にも注力していきました。2023年には前年度に訪れた視察先の実践者のみなさんを京都に迎えたトークイベント「京都空家会議 KYOTO DIG HOME SUMMIT」、2024年にはイベント「KYOTO DIG HOME MARKET」を実施し、カードゲームも開発しました。

